



独断砂防国際協力序説その7

渡辺正幸*

まあ、そう深刻になりなさんな！　そういう日本にも無視された災害死の事例がわんさかあるのです。たとえば1945年9月17日の枕崎台風による広島県呉市の死者2,012人に関する公刊の資料は昭和26年に広島県砂防課がまとめた「昭和20年9月17日における呉市の水害について」以外には全くないと柳田邦男は「空白の天気図」で述べている。

1945年1月13日に愛知県南部幡豆郡で起きたM=7.1の三河地震は死者1,961人をだしたが、当時の軍部の戦意を喪失させるとの判断で秘匿されて世間に知らされることはなかった。

「昭和20年8月15日をもって地上における最大の災厄である戦争は終結した」と防災ハンドブックが記すとおり、戦場で起きた被害・損害を秘匿したり過小評価するのはどちらの軍部もやることであるが、帝國陸海軍は度が過ぎて完全な負け戦を嚇々たる武勲にしたてあげていたことは史書を見れば明らかである。1945年帝國陸軍の関東軍は保護の任に当たるべき日本人居留民200万を旧満州の荒野に置き去りにして逃げている。当時オールマイティーで満州国に君臨した軍の任務に国民の保護があったはずであるがそれは無視された。

いずれにせよ、万オーダーの人命の帰趨が明確でないままに社会が動いているという事実を認識しなければならない。「そのような社会なのだ」とも「その程度の社会なのだ」とも考えられるが、その事実があらわす社会はどういう社会なのだろうか？「10人十色」と言い、「所替われれば品変る」とも言うが、人の命の値打ちが変ることはないと信じたい。“渡辺さんは日本では人として認められているかもしれないが、ここへ来たらスプの材料だよ”なんという所へは行きたくないからだ。

民主主義社会では、A氏あるいはBさんの行方が判らないとなれば大騒ぎになる。大捜査や時として山狩が行われる。一人ひとりには戸籍をもち住民とし

て登録されているから、死ねば戸籍から抹消されるがその時には検死という法律上の手続きを得なければならぬ。災害で行方不明になった場合には生死が不明なわけであるが、戸籍からの抹消は提出された失踪届を裁判所が判断して決めることになる。戸籍からの抹消といった問題でなくても、人ひとりの存在は税・兵役・保険・教育・保健等の義務・公課・サービスの対象として行政のシステムに組込まれているはずである。だからこそ、人がいなくなれば遅かれ早かれ法的・行政的な決着が必要になるはずである。

しかし、そのような気配は半年経っても何も無い。したがって、唯一考えられることは、万人オーダーの人が行政的に認知されることなく住んでいるということである。

このようなことは開発途上国では珍しいことではない。行政に無視されるどころか全く行政をアテにしていない生活があるのも珍しいことではない。そういうところでは行政はありがた迷惑なのである。何もしてくれないくせに規制だけはうるさい—無いほうがいいという考えをもつ人達も多いのである。

ヴェネズエラの社会の特殊性に目を向けるとその背景が浮かんでくる。

ヴェネズエラは産油国だから石油の値段が高騰すると景気がよくなる。すると、隣国のコロンビアから労働者が収入の機会を求めて越境してくる。国境警備はなきに等しいから金になる話に尾ヒレがついて人口流入が続く。言葉が同じスペイン語だから生活には全く不自由はない。しかし、ヴェネズエラも中南米の国の御多分にもれず貧富の差が極端で、良い土地はウルトラ・リッチの大土地所有者に占有されている。金をもたない新参者が住んだり耕す土地はどうしても、大土地所有者が見向きもしない余った土地、すなわち斜面・谷底あるいは段丘面に限られる。とりたてて教育も技術ももたない新参者がどっと流入した場合、労働力は買い手市場になり新参者が貧しい境遇から脱け出す機会は日を追って少な

*元建設省土木研究所砂防部長



写真-5 カリブ海に沿う扇状地のリゾートとその背後の断崖斜面に張付く被災したスラム

くなる。こうして、斜面・谷底・段丘はスラムとして固定される一方でその数は増加していく。

輝く三角末端面はそのような人達が住むスラムなのです。世界には貧しい人の集団が住んでいるスラムが沢山あります。悲惨かつ陰惨な貧困の中に一瞬の喜劇をみるカルカッタのスラム（歓喜の街：河出書房新社刊）、マニラのトンド、その形成と8千人の命とともに消えた経過が入念かつ愛を込めて語られているレイテ島のイルサヴェルデ（洪水で消えた街：草思社）、そして街の半分近くがスラムになっているダッカやラングーン、リオデジャネイロのファベラ、グアテマラのレモンシティ等々私が訪れたスラムは結構多いのですが、このようなスラムも大きく2種類に分けられるように思います。

前に挙げた5つが「おこぼれ依存型」であり、あとの2つが「独立自尊型」だということです。前者は、人口比率でおそらく数パーセント程度以下のウルトラ・リッチの食べ残しを残りの住民が分け合って暮らすものであるのに対して、後者は独立採算制で自分の食い扶持は自分で稼ぐ—政府の世話にはならない分だけ政府の干渉も排除するという気高いタイプです。

独立自尊型は力をもっていて、政府が不用意に彼らに干渉しようものなら、そのために派遣された役人や警官は生きて彼らの支配地域から出さないと徹底的なものです。リオデジャネイロでこのようなことが実際に起こりました。1990年の環境サミットが当地で行われるに先だって、ブラジル連邦政府が治安確保のためとして送り込んだ警官隊1個小隊が生還しなかったのです。「共和国の中であって別に主権をもつ独立国」と言っても過言ではない状態

です。どうしてこのように共和国の中に独立主権国家が存在するという状態になるのでしょうか？

この、スラムの2大分類からみると、ヴェネズエラのスラムは中間種と考えられます。

大部分が生計をおこぼれに依存していながらも、社会秩序や権力に対抗するある程度の力をもっているからです。意識的に「対抗する」というよりも、「政府が本気に相手にしない」から「やりたいようにやっている」ということかもしれません。下級の軍人や警察官には貧困層の出身者が多いために—金持ちは叩き上げの警官や軍人になりたがらない—法律を執行しろといっても、警官が住民に同情して取り締まりの実効が挙がらないというところに断層三角末端面のイルミネーションの理由があるのです。

法律は「盗電は犯罪である」としている。しかし、犯罪を取り締まる警察官が貧困層の出身なので、厳正に取り締まらない—電気は無料だ—夜になってもスイッチを切らなくてよい—という論理が確立しているのです。

「電気代を支払わなければ電線を切る」などと言えば袋叩きに遭って命の保障はないというそれなりの秩序ができています。「法律がある—法律は正義である—法律は執行される」という常識が成立たない独自の正義をもつ社会が厳存しているのです。「それは俺達の正義でも常識でもない」と主張できる力を備えたスラムがあるということです。

ヴェネズエラのスラムが中間種だと思われる根拠はその居住環境—といえば聞こえがいいが実際は危険度の幅といった方がはやい—の幅の広さです。

「おこぼれ依存型」の場合は居住環境が、多くの場合、一連托生の状態にあります。雨期にはスラム全域が水没して住民はなけなしの堤防の上に鈴なりの状態に追い込まれる。海岸低地のスラムでは波にさらわれて全員平等に消滅する。土石流段丘や河岸段丘のスラムでも一発の土石流や洪水で全員消滅の危険性が極めて大きいというように、「まるごと」、「All or Nothing」で住民が同じ運命に平等に遭う—水没から「死ぬ順番待ち」の状態まで災難のレベルの違いはあれど—危険性を共有しているという特徴があります。

一方の「独立自尊型」は日本のウサギ小屋型の住宅事情からみると、外見はスラムとはいえないサイズと高級感をもつ家屋からなる団地が、地域としてのまとまりを保ってできていてその生活水準や危険

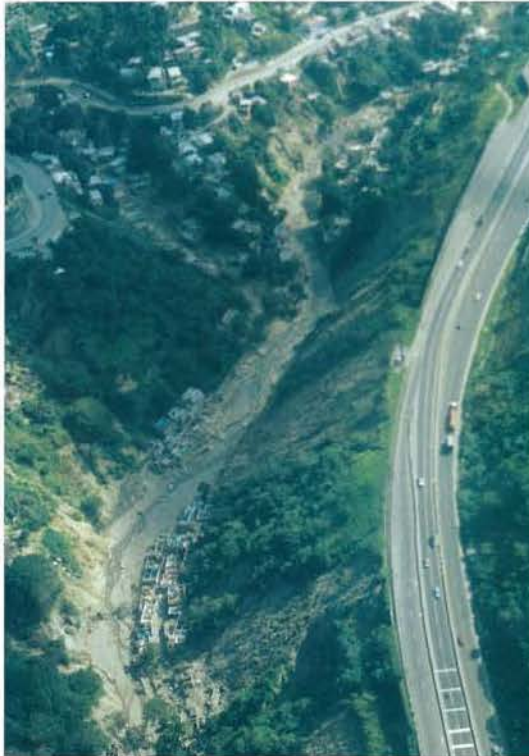


写真-6 こんな所にも住んでいるの?! 「死ぬ順番を待つ」
ているに等しい危険な斜面に上下にある住居群

度に大きな差がないように見えます。難点はその立地が住みにくい、従って金持ちが住まない斜面だという点です。

ヴェネズエラのスラムは、絢爛たるイルミネーションを誇る三角末端面のスラムから河床低下が進む溪谷の急斜面まで、すなわち、豪雨でもなければ崩れない“安定”斜面から自重で崩落しつつある“危険斜面”に至るまで、交通の便だけを頼りに斜面利用が極限まで進んでいることです。貧困層の中にも生活水準と居住環境の危険度にかなりの差があります。

ともあれ、発言力をもたないスラムは、夜になると蠟燭あるいはケロシン・ランプの明かりになり、その余裕もない貧しさでは暗黒の闇という生活を強いられるのです。

その力の源泉は何か？ が問題です。独立した共和国のなかに独立した地域を維持するにはそれなりの力（発言力・実行力）が必要です。政府が本気に相手にしないとんでも、ある日、軍隊を動員して爆撃でもすれば敵わぬことは一目瞭然、しかし、それをしない—それができない—それをさせない—政府をそこまで本気にさせない—そんなにしても何の得にもならないという理由があるはずで。

それはどうやら「麻薬」のようです。麻薬取引が

生み出す資金だと思われます。

麻薬の生産・精製地域と大消費地（市場）を結ぶルートにあるスラムは元気がいいと言えそうです。麻薬のルートから離れたスラムは名実ともに貧困だということです。問題は、裕福なスラムも、名実ともに貧困なスラムも、ともにサイズが大きくなり数が増加し人口が増大していることです。

麻薬産業がルート上の地域社会を活性化するとしても、末端の消費市場の社会は悲惨です。結末は人生の破滅そして社会の荒廃・破壊です。たとえ、独立自尊のルート上の社会にしても、それが民主主義や人権が尊ばれる社会でありうるわけがありません。鉄の規律と暴力が支配する専制者の社会であることはパナマのノリエガ氏の経歴が物語ります。どっちにせよスラムの生活は人類社会の恥部であり消滅させなければなりません。

スラムと砂防事業がどう関わるんだ？ と聞くあなたの感性はすばらしいと思います。

砂防事業でスラムの悲惨を解消することができるのか？ 私は可能だと信じています。これからますます可能性が大きくなると考えています。問題は砂防事業に携わる人の社会を見るすなおな眼力・生きることへの共感・構想力・計画力・実行力そして体力だと思います。